

Title	志賀直哉「雨蛙」論 : 変貌する女・惑乱する男
Author(s)	村岡, 聖
Citation	阪大近代文学研究. 11 P.34-P.51
Issue Date	2013-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/68322
DOI	10.18910/68322
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

志賀直哉「雨蛙」論

——変貌する女・惑乱する男——

村岡 聖

はじめに

「雨蛙」は大正二三年、「中央公論」に志賀直哉によって発表された短編小説である。志賀は「『雨蛙』に就いて」において、本作の執筆動機について自己言及している。

元来「雨蛙」は長編「暗夜行路」の後篇を書き上げた所で、丁度その反対なものが書きたくなる要求から書く時の為めにとつてあつた、とつて置きの材料だったのであるが、「暗夜行路」が却々埒あかず、その間に一度短編らしい短編を書きたくなり、それでその材料に手を付けた。

この志賀の言葉によつてか、本作の読みは『暗夜行路』との関係で論じられたり、作家論的見地から解釈されたりすることが多かった。しかし、本作を『暗夜行路』や作家志賀直哉を離れたところから読めば、どのように読めるだろうか。

結論から言えば、本作は変貌する女と、それによつて惑乱

する男、その夫婦の懸隔を描いた物語であると論者は考えている。以下、詳しく見ていきたい。

一 妻を愛する賛次郎

この小説の主人公は美濃屋賛次郎である。賛次郎はH町の造り酒屋の息子として生まれ、農科大学に進学して市の寄宿舎に下宿していたが、父の死亡により家に呼び戻され、H町での生活を送っている。彼は大学を中退したことに不満はなく、むしろ「学士になつて偉さうな顔をするなど云はれないだけでも気安い事だ」と考え、さらに、家業を取り仕切る立場になつても、それは祖母が取り仕切り、彼は文学を趣味として楽しんでゐる。このような賛次郎に対して、木村泰子氏は「受身的な人間」⁽¹⁾、越智良二氏は「要するに賛次郎は総てを素直に受け容れる人物」⁽²⁾、岸規子氏は「ごく平凡な青年」⁽³⁾といった人物像を見る。これら先行論に基本的に異論はない。学士にならずともよいとの考えや、家族の意向に

反抗しない姿勢からは、彼の淡泊さや温厚さが読み取れると言えらるう。

そのような受身な賛次郎は、妻を愛する男でもある。これより以下、彼の妻への思いを見ていこう。彼のせきへの思いは結婚前からあった。

同じ頃、美濃屋の賛次郎も結婚した。遠縁の農家の娘で彼は前から好きだった所に祖母から云ひ出され、一も二もなく承知したのである。

彼のせきへの気持ちが始めから決して小さくないことが「一も二もなく承知した」ところから窺える。また、結婚後三年以上経た現在においても、その気持ちは持続している。それは、せきが賛次郎の勧めにより文学の講演を聴きにA市へ向かった日の賛次郎の行動から読み取れる。まず、せきに文学の教養を教えようとする賛次郎は「ゆつくりして来なさい」と優しい言葉を掛けて講演会に向かう妻を送り出している。また、次の引用を見よう。

(せきは・論者注) 間もなく待たせてあつた俥に乗り、出掛けて行つた。賛次郎は店前に立ち、その後姿を見送つた。今は田舎でも余り見かけなくなつた廂髪を揺られながら、生垣の続く、長い一本道をせきは一度も振り返らず、段々に遠ざかつて行つた。

妻の後姿を見送る賛次郎の姿には彼女への愛情の深さが示されていると言えらるう。さらに、彼は祖母の看病をしながら

らも、講演会に出かけた妻の身の上を考えることを忘れない。「今頃はどうして居るだらう」と「彼は時々せきの上を思」うのである。そして、講演会があつた翌日である次の引用場面を見よう。

彼は食事を済ますと直ぐ自転車です市へ向ふ事にした。

前日とは急に寒くなつたので、彼はせきの為に肩掛けを風呂敷包みにし、自転車のハンドルに懸けて出た。

「食事を済ますと直ぐ」という素早さで、「せきの為に肩掛けを」わざわざ持つていく賛次郎の姿からは、彼の妻への細かい気遣いが容易に見て取れる。賛次郎は妻せきを愛している。

二 夫に従順なせき

では、せきとはどのような人物であろうか。木村氏は「精神的な何ものも持たない、肉感的な女性」、「無道徳、無節操」で「自然人としての美しさ」(4)を持つ者としてせきを規定する。同じく越智氏も「素直で無邪気だが、無自覚で未発達な自我を思わせる」(5)と述べ、岸氏も「せきは邪気をもたぬ、童女のような存在である」(6)と述べる。また、田中繪美利氏は本作をフェミニズム批評の視点から考察し、せきを「(男)にとつて理想の妻として造形されている」(7)人物として分析し、また張蓮氏も「無口で学問のない田舎娘せきは、希薄な自我の持ち主で、受身的な存在、そして、従う

だけの女性として描かれ、「産めない」女として造形されている。彼女はまるで生きている美しい人形のような存在である」と、同じくフェミニズムの視点からせきを見る。作品を読むにあたっての視点や立場、及び評価の違いはあれども、受身で思想性に欠け、しかしそれ故に従順なせき像は概ね共通している。

本論でもせきについて見ていきたい。彼女について描写されているのは以下の引用部である。

無口で余りはきくししない、学問のない、然し誠に美しい田舎娘だつた。背丈のない事を当人は苦にして居たが、四肢の均等した発育が、それを少しも醜く見せなかつた。首から上の小さい、髪の毛の豊かな――髪は少し赤かつたが――皮膚の滑かな、鼻の形の正しい、そして全体に如何にもクリ／＼と肉附に弾力のある事が見るから健康さうな感じで、何人にも一種の快感を与へた。一つ当人の知らない欠点を云へば茶色の勝つたその眼に光がなかつた事だ。

「四肢」、「髪」、「皮膚」、「鼻」、「肉附」と細部に亘る容姿の説明と、作品終わりに「美しい肉附のせき」とあることから、せきが肉体的に恵まれていることが窺える。

また、せきは「学問のない」人物と記されている。この箇所以外にも、例えば次の場面からもせきが無学の女であることが読み取れる。

彼はせきにもさう云う方面の教養を与へたいと思つた。一人では何となく淋しかつた。が、せきにそんな事は無理だつた。賛次郎は以前の自分を憶ひ、察しられたから、落胆もしない代り、念ひ断りもしなかつた。

ここでいう「さう云う方面の教養」とは、当然のことながら文学的教養を指すと考えられる。しかし、現段階においてせきがその教養を身につけることは「無理」とある。賛次郎はそれでも諦めようとはしないが、彼女にとって文学的教養を身につけることが不可能であることは劇作家Sと小説家Gの文学講演を聴いた後でも変わらない。講演の翌日、迎えに来て「講演は分つたか？」と尋ねる賛次郎に対して、「せきは首を振つた」のである。ここからもせきが無学の女であることがわかる。

また、そのようなせきの無学さに加えて、自身が妊娠しないことを家制度から考えれば気にすべきなのに、気にも留めないところに彼女の無思想性が示されている。さらに、講演後の迎雲館で、いかがわしさを感じさせる会話の後、竹野の家ではなく迎雲館に泊まることを勧めてくる芳江らに対して、本来なら断る方がよいと感じられるのに、「どちらでも」と答えて宿泊をはつきりと断らないところに、彼女の思慮の浅さ、あるいは貞操観念の無さが表れていると言えよう。これら無学、無思想あるいは思慮の浅さや貞操観念の無さといった無い無い尽しの性質が、彼女の眼の光の無さに象徴されて

いる。

さて、そのようなせきは、賛次郎が彼女を思っていた程には積極的に夫を愛する人物ではない。講演会に出かけていくせきの後姿を賛次郎は見送っていたが、「長い一本道をせきは一度も振り返らず、段々に遠ざかつて行つた」のである。

しかし、ではせきが夫を嫌悪していたのかと言えば、決してそういうわけではない。賛次郎の祖母が体調を崩し、二人して講演に行けなくなつた次の場面を見よう。

「お前はどうかするか。竹野君が待つて居ると思ふが、お前一人だけでも行く方がよくはないか。お前が行けば私も会の模様を聴く事が出来るし。さうしないか」

「へい」
「病人は私が居れば心配ない。案じず、ゆつくりして来なさい」

「へい」せきは無心の眼差しを向け、かう答へた。
せきは「無心の眼差し」を向けてただだ「へい」とだけ答へ、夫の言葉に素直に従う。文学の教養を身につけることが無理なのであるから、そもそも彼女は文学に興味がないと考えられる。であるならば、一人で行くのを断つてもおかしくはない。しかし、せきは言われるがまま講演へと出かけていく。「無口で余りはきくししない」とされるせきは、そもそも主体性の無い女であると考えられるが、そうはいってもやはり、興味の持てない事柄に関して夫の言うことに素直に従

うその姿からは、夫に対して従順な彼女の性格が読み取れる。

三. せきの変貌

しかし、そのような従順なせきは、作品内で不変の存在として、その従順さを貫いているであろうか。思うに、そうではない。せきのその従順さはあくまで講演会に出かける前までであつて、講演会後の迎雲館での小説家Gとの同衾事件を経て、彼女は変貌する。

その変貌が見出せる箇所としてまず考えられるのが、せきの髪型と眼である。今では田舎でも余り見かけなくなつた「廂髪」から、迎雲館事件を経て、「当世風」の「耳隠し」へ。ここに明らかな外見上の変貌がある。

また、せきは光のない眼を持つ女であつた。それが迎雲館事件後、変化する。

せきは少しも口を利かず、賛次郎のあるさへ意識しないやうに、ぼんやり遠い一点を見つめて歩いてゐた。その様子が賛次郎には何かせきが其処に或幻影を認め、それを見つめる事から気の遠くなるやうな陶醉を感じて居るのではないかしらといふ気が不図して来た。打ち砕かれた淋しさの不機嫌としては余りにその眼は何かを夢見てゐた。如何にも甘い夢だ。それに酔ふ一種の喪心状態に思はれた。

光のない眼から、何か甘い夢を見る眼へ。ここにも、せきの

変化の一端を見て取ることが出来る。また、甘い夢に陶醉するせきに、岸氏はせきの「官能の目覚め」、「女」であること」(9)の目覚めを読む。

しかし、眼の変化には考慮せねばならない点もある。それは、せきが甘い夢を見ているのはせき自身が認めたことではなくて、あくまで賛次郎にそのように思われたに過ぎないということである。しかも、この時の賛次郎の心理は「不思議な」「発作的」なものであり、通常のものではなかったと考えられるため、そのような特殊な心理状態において感じたせきの様子、即ち何か甘い夢を見る眼は、賛次郎のせきに対する認識を示すものであつて、彼女の客観的変貌の根拠としては些か心許無い。よつて、眼の変化のみを以てしてせきの変貌を見るのは難しいと言わざるを得ない。

そもそも、作品内においてせきの心情の客観的描写は少なく、彼女のそれは読み取りにくい。「無口で余りはき／＼しない」と形容されるだけあつて、ほとんど言葉を発しない彼女は隠微な存在である。

しかし、次の箇所注目するとどうだろうか。せきが迎雲館から竹野の店に戻つて来、賛次郎から「疲れたやうな顔をしてゐるね。直ぐ帰らうか？」という問いを受けるのに続く場面である。

せきは首肯いた。

「講演は分つたか？」

せきは首を振つた。

「さうか。それはいけなかつたね。けれども山崎女史の唄があつたさうだね。いい声だつたらう？」

首肯いた。

「昨晚迎雲館では山崎女史と一緒にだつたか？」

首を振つた。

「せき一人にされたのか？」

その時せきは横を向いた儘、意味の解らぬ微笑を浮べた。賛次郎はどきりとした。そして思はずせきの顔を見凝めたが、せきは二夕側になつた力ない眼差しでぼんやり遠く往來の方を見てゐた。賛次郎はそれ以上訊く気がしなかつた。それは許されてない事のやうでもあり、自分としても訊くのが恐ろしかつた。訊けば直ぐ正直に答へるせきだけに恐ろしかつた。

ここでまず気になるのは、賛次郎の「せき一人にされたのか？」という問いに対して「横を向いた儘、意味の解らぬ微笑を浮べ」るだけという彼女の答え方が、「訊けば直ぐ正直に答へたと言えるのか、ということである。この疑問は、少なくとも賛次郎には「訊けば直ぐ正直に答へる」ような従順さを持つた妻と思われていたせきが、この場面においても果たしてその通りの彼女なのかということに繋がる。「意味の解らぬ微笑」を文字通り受け取れば、それが何を意味しているのかは解釈不明ということになるが、問題なのはその意

味ではなく、答え方である。竹野からSやGなどの話を聞き、せきの否定によって彼女が芳江と一緒にでなかつたと知った賛次郎としては、「せき一人にされたのか？」ということに気がかかるのは当然と考えられる。そしてこの問いは二人の夫婦という関係において相当重要な問いである。にもかかわらず、肝心なところで「訊けば直ぐ正直に答へる」と思われていたせきは答えない。ここに、かつての従順なせきではなく、変貌したせきが読み取れるのではないか。

ただ、引用部の敷衍前、先に挙げた髪型の箇所、「恥かしさうに伏目をしてゐるせき」とあることから、ここでの微笑も羞恥心からくるものと解することもできる。しかし、さらにここで注目したいのが二度目の賛次郎の問いに答えるせきである。妻への「不思議な気持」と示される欲情を挟んで、賛次郎はもう一度彼女に迎雲館での夜のことを問う。

「あのね」彼は息をはずませながら、優しい声で云ひ出した。「昨夜は一人でなく、誰か側に寝たか？」

「初めは芳江さんが寝てみました」

「それから？」

「何時の間にか芳江さんが居なくなつてGさんが入つて来ました」

「それで？」

「GさんはSさんと芳江さんに追ひ出されて来たのだといひました」

「それで？」

「……………」せきは急に下を向いた。

ここで注目したいこともやはりせきの答え方である。一見すると、今回は聞かれたことに對して「直ぐ正直に答へ」ているように見える。がしかし、「昨夜は一人でなく、誰か側に寝たか？」という問いに對する「初めは芳江さんが寝てみました」という答えは、質問者にとって非常に引つかかる答えではないだろうか。なぜなら、「初めは」という言葉は、否が応でもその言外に「後」があることを聞く者に想像させるからである。田中氏は「せきの変化を認めているのは、せきの姦通によりアイデンティティを揺るがされた賛次郎であり、〈語り手〉である。せきは以前から、自ら見ることはせず、ただ、夫の言葉を待つだけの〈女〉だった」⁽¹⁰⁾と述べている。しかし本当にそうだろうか。確かに、はじめの「昨夜は一人でなく、誰か側に寝たか？」という問いかけこそ、賛次郎から発せられたものであり、一見すると、その後も賛次郎が「それから？」「それで？」「それで？」と尋ね続けて会話をリードしているように見える。がしかし、その後の会話の主導権は逆である。「初めは」と答えられれば、誰でも「それから？」と聞きたくなる。その後、いきなり黙り込んで「それとして」「それで？」と問いたくなるのは必然である。ここは、夫が妻の言葉を引き出ししているように見えて、実は妻

の方が夫の言葉を引き出ししているのである。そして何より、Gが来てどうなったのかという核心については、せきは黙する。「せき一人にされたのか？」という一度目の問いは会話の流れによつて提示されたものであるから、その流れに沿つてせきが羞恥を感じて黙つたという解釈はあり得るし、事実、沈黙の原因の一端は羞恥によるものであると考えられよう。

しかし、二度目の問いかけはその始まりからして既に羞恥を感ずべき内容であり、賛次郎夫婦の関係に大きく関わる核心的問いである。さらに言うなれば、一度目の「せき一人にされたのか？」という問いと、二度目の「昨夜は一人でなく、誰か側に寝たか？」という問いは、結局は同じことを問うているようでも、後者は前者以上に「誰か」という他者を意識した問い方と言える。つまり、二度目の問いは一度目以上に核心的である。であるから、ここで仮にせきが賛次郎の問いに対して恥ずかしいという感情のみで答え辛かつたのであれば、一度目と同じように、はじめから「……………」と黙り込むというのが自然ではないか。実際に、せきは町へ帰る道すがら黙り続けていた。

・ 俣の来る間、二人は向ひ合つてゐたが、話が全でなかつた。

・ 朝はそれ程でもなかつたが、向ひになると風は寒かつた。せきは黙つてゐる。話しかけても肩掛けに頬を埋めたまま、返事をしなかつた。打ち砕かれた淋しい心、何をい

つてもそれに触れさうな恐ろしさで、凝つと、不機嫌に黙り込んでゐる、さういふせきであらうと賛次郎は思つた。

・ せきは少しも口を利かず、賛次郎のゐるさへ意識しないやうに、ぼんやり遠い一点を見つめて歩いてゐた。

竹野の店からH町へ帰るまでの描写の、決して多いとは言えない分量の中で、せきの沈黙が繰り返し描かれている。これ程までに黙していたせきが、迎雲館事件後、初めて賛次郎に応じたのが「初めは芳江さんが寝てゐました」であつたのである。「話しかけても肩掛けに頬を埋めたまま、返事をしなかつた」という一文から、賛次郎は前からせきに話しかけていたことがわかる。しかし、「訊けば直ぐ正直に答へる」と思われていたせきは、それには返事をせず黙り込み、二度目である「昨夜は一人でなく、誰か側に寝たか？」という夫婦関係において重要な問いに対して、初めて、しかもその直前まで「賛次郎のゐるさへ意識しないやう」であつたにもかかわらず、はじめに芳江のことから答えたのである。しかも芳江のことは一度目の問いかけにおいて首を振ることで最後まで側にいなかったことを自身で既に賛次郎に伝えていたにもかかわらず、である。このように疑つてみれば、この返答には従順さよりも、むしろ技巧的な臭いが感じられはしないだろうか。

先にも述べたように、仮にここでもせきが羞恥心から答え

るのを避けたのであれば、再度尋ねてくる夫の質問に対してははじめから黙っていても何らおかしくはない。「……………」せきは急に下を向いた。」とあるところを、恥ずかしさが意識されたから「急に下を向いた」のだと解することもでき、実際、恥ずかしさが皆無だったわけでもないだろう。しかしここで論者が述べたいことは、せきのこの一連の返答に、羞恥のみではなく、多少なりとも蠱惑的姿勢の混在が確認できるのではないかとということである。張蓮氏はせきのこの沈黙を、気まずさ、遠慮、躊躇として捉え、「それは、一面から見れば、せきが自らの意思で思考を始めた様子」でもあり、ここにせきが「考える女」⁽¹⁾になった変化が確認できると論じる。しかし、ここは単にせきが「自らの意思で思考を始めた」ということ以上のものが読み取れるのではないかと考える。即ち、それまではあれだけ黙し続けていたにもかかわらず、始めから「急に下を向いた」方が自然と思われる、また夫が最も気にしているであろうと考えられる問いに対してのみ初めて答えたこと、しかもその答えが焦らすような返答であったというところに、せきの夫への玩弄の姿勢が読めるのではないか。この場面をせきの変貌と捉えないのであれば、今まであれ程黙っていたせきが羞恥を最も感じるはずのこの質問にだけ答えるということが、非常に奇妙なことになる。そして、であるならば、一度目の問いに対して「意味の解らぬ微笑」を以て答えたのも、本当に羞恥心のみからだったの

かと疑わしくなる。やはりここは、「訊けば直ぐ正直に答へる」せきから、もはや従順ではないせきへの変貌を示す場面であったと考えられる。

ただ、これらの蠱惑的態度の全てが彼女の策略によるものであると述べるつもりでは決してない。先にも言及したように、あくまで二度目の「昨夜は一人でなく、誰か側に寝たか？」という問いは賛次郎から発信されたもので、その発言そのものを釣り出すことをもせきが計算していたとは考えにくい。ただ、偶発的且つ、半ば無意識的なものであったとしても、その返答には何の意図もなかったとするのは早計ではないかと考えるのである。なぜならば、今述べたように、それでは奇妙と考えられる点があるからである。その意図は微弱であったとしても、そこに彼女の變貌を疑うだけの余地は十分にある。

つまりこれら一連のせきの返答法に、「無口」と形容されつつも、講演会に「お前一人だけでも行く方がよくはないか」という夫の提案及び「ゆつくりして来なさい」という言葉に対しては「へい」と言葉を発し、少なくとも賛次郎には「訊けば直ぐ正直に答へる」と思われていた従順なせきとは明らかに違う、夫の質問をわざと焦らし、玩弄するように答える蠱惑的なせきへの変貌が見て取れるのである。

そして、この變貌のきつかけが、言わずもがな迎雲館での出来事であった。そもそも迎雲館とは、「市一等の旅館」で

あつて、この市は賛次郎の故郷であるH町とは対照的な場であつた。H町は町民の大方が「土着の旧家で、分家々と分れて殖えた為に」互いに「道角の誰」、「藪前の誰」、「棒屋の誰」と呼び合い、その昔藪が伐採されていても先祖が棒屋を廃業していても「依然その儘に呼んで」いるような人々が住む町である。また、そこに住む賛次郎の祖母は家には主人がおらねばならないと思ひ、家の跡取りを頻りに欲する旧い考えを持つ人物である。ここから、H町の旧態依然な性質が確認できる。それに対してA市は、賛次郎夫婦を運ぶ車夫が「A市の郊外に工場が出来る」と語るように、発展・変化する市である。また、賛次郎が文学に興味を持ち出したのが「町へ帰り、その生活を幾らか単調に感じ出」したことに起因すること、彼が「市へ出る度、何かさういふ読物を買つて帰るやうになつた」こと、A市で文学の講演会が開かれたり、「文学をやる女」が気に入らない竹野の長兄がH町住んでいたりすることから、H町は文学を享受する基盤が整っていない、即ち文学が流行らない町であり、A市は文学を享受する基盤が整つた、即ち文学が流行る市ということがわかる。さらにA市に関しては次の引用を見たい。

芳江は男との関係ではよく噂に上り、Sとの関係もそれを知る者には寧ろ公然の秘密で、市での評判は余りよくなかつたが、その豊かな肉体と声と派手な性質とでは、今は此市になくしてはならぬ女のやう若い連中からは思は

れてゐる、さういふ女だつた。

引用したのは芳江について説明された部分であるが、これをA市に注目して言えば、A市は芳江のような女が必要とされる場所であるということになる。つまり、せきは旧態依然の文学が流行らないH町から、文学が盛んで、芳江のような女が求められる、変化するA市へ移動したのである。ここに、せきの変貌を示す伏線があつた。

四．賛次郎の惑乱

見てきたように、迎雲館事件後、せきは夫への従順さを失くしていく。そのような妻に対して、彼女を愛していた賛次郎は惑乱していく。

それは、あの「意味の解らぬ微笑」を見た時から始まる。この微笑は賛次郎にとつて大きな衝撃であつた。彼はそれを見る前から彼女が昨夜男と迎雲館に宿泊したらしいことを竹野から聞いて知つていた。その時から彼は不安な気持ちに襲われてはいるが、それは竹野から聞いた話の内容によるものというよりも、主にその話をする竹野の様子から伝播されたものに過ぎない。以下の場面である。

彼が水菓子屋の店前で自転車を降りた時、竹野は溝板の上で遠くから届いたらしい林檎の箱を開けて居た。そして今まで俯向きに赤くなつた顔をあげると当惑の色を浮べながら、前夜せきは迎雲館に泊り、今、此処に居な

い事を告げた。賛次郎は眼を丸くした。せきと迎雲館、此対照が最初彼には甚く滑稽に映つた。市一等の旅館で、自分達には足踏ならぬ場所のやうに考へて居たからだ。然しそれも竹野の何か事ありげな気配で、彼は直ぐ不安にされた。

竹野からせきが迎雲館に宿泊したことを知らされた賛次郎がまずはじめに感じたことは、せきと迎雲館という対照の「滑稽」さであつた。この段階では、彼はせきに何か特別の事情があつたのかという具体的な不安は抱かず、あくまで竹野の「何か事ありげな気配」に不安を感じているだけである。それは、竹野から迎雲館での詳しい話を知らされた直後の次の場面でも同じである。

賛次郎には話の重さが分らなかつた。何でもない事のやうでもあり、何かしら非常に困つた出来事のやうでもあり、見当がつかなかつた。只、それを話す竹野の意気込が只事でなかつた。

ここでも、賛次郎にとって迎雲館の件は「見当がつかない」とこととされ、彼はただただ「竹野の意気込」の凄味を感じているに過ぎない。賛次郎の不安や困惑はまだ微弱で具体的なものではなく、漠としたものである。だからこそ、せきが竹野の店に髪型を耳隠しにして帰つてきたとき、賛次郎は「いぢやないか」と答え、「殊更気軽に」階段を降りていくだけの余裕がまだあつたのである。「話の重さが分らなかつ

た」賛次郎はここで彼女の髪型を褒め、また顔色を窺つて、「直ぐ帰らうか？」と彼女を労わっている。彼の妻への愛情がここでも見て取れる。ところが、先に引用したせきの「意味の解らぬ微笑」によつて賛次郎は初めて「どきり」とさせられ、心をひどく乱されるようになるのである。重複を厭わず、もう一度その場面を引用する。

「昨晚迎雲館では山崎女史と一緒にだつたか？」
首を振つた。

「せき一人にされたのか？」
その時せきは横を向いた儘、意味の解らぬ微笑を浮かべた。賛次郎はどきりとした。そして思はずせきの顔を見凝めたが、せきは二夕側になつた力のない眼差しでぼんやり遠く往來の方を見てゐた。賛次郎はそれ以上訊く気がしなかつた。それは許されてない事のやうでもあり、自分としても訊くのが恐ろしかつた。訊けば直ぐ正直に答へるせきだけに恐ろしかつた。

彼の心は甚く乱された。

賛次郎にとって、漠然としたものではなく、実感として不安を感じたのはこの時である。

ここから彼の混乱が始まる。愛する妻が他の男と同衾したかもしれないという不安が彼に押し掛かる。

俣の来る間、二人は向ひ合つてゐたが、話が全でなかつた。賛次郎は火のない宣徳火鉢に窮屈な姿勢で両手を

突き、自身の心の空虚と戦つてゐた。出窓の千本格子を透して向う側の競売屋の二階が見えた。赤地に白くメリヤスとぬいた大きな旗が秋の軟い陽差しを受けてゆらり／＼大きく揺れてゐた。

「意味の解らぬ微笑」によつて心を乱された賛次郎は、その後、「自身の心の空虚と戦」うこととなり、夫婦の間にはまるで話がない。「窮屈な姿勢で両手を突」く賛次郎の姿からは、「心の空虚」と格闘する緊迫感が伝わってくる。また、風に大きく揺れる大きな旗は、越智氏⁽¹⁾が指摘するように、賛次郎の心の乱れを象徴している。その後、町へと帰る車の中で、心を乱される前は良く思つた妻の髪型や化粧を賛次郎は醜く思う。ここに、そのような装いをしているせきそのものへの嫌悪が含まれている可能性はある。

しかし、賛次郎がここで完全にせきを嫌悪したのかと言え、決してそういうわけではない。彼は黙りこくるせきの心情を「打ち砕かれた淋しい心、何をいつてもそれに触れさうな恐ろしさで、凝つと、不機嫌に黙り込んでゐる、さういふせきであらう」と斟酌しているのである。賛次郎はせきの微笑を見てから心が乱され、それ以上「訊くのが恐ろし」くなつてゐる。そして、竹野にまた来いと言われても「ありがたう」と「響きのない声」でしか答えられない程「空虚」な心になつてゐる。にもかかわらず、彼は妻の心の淋しさ、恐ろしさ、不機嫌さを思いやる気持ちはあるのである。また、そ

の後の車での帰り道では、車夫との話が辛くなつた彼は車を降りようとするが、ここでもせきの疲れを考慮はしている。賛次郎はせきの「意味の解らぬ微笑」から心を乱され、「空虚」な気持ちに苛まれながらも、完全に妻を嫌悪し切つたわけではない。

そしてその後、賛次郎がせきに欲情する場面が来る。「ぼんやり遠い一点を見つめて歩」くせきの様子に、彼は次のように感じる。

その様子が賛次郎には何かせきが其処に或幻影を認め、それを見つめる事から気の遠くなるやうな陶醉を感じて居るのではないかしらといふ気が不図して来た。打ち砕かれた淋しさの不機嫌としては余りにその眼は何かを夢見てゐた。如何にも甘い夢だ。それに酔ふ一種の喪失状態に思はれた。賛次郎には変にはつきりとせきのその心持が映つて来た。彼は思はず頬に血の昇るのを感じた。胸の動悸を聴いた。力に溢れ切つたやうなと云はれるG

と、此の美しい肉附のせきと、此關係は実際不思議な力で彼の肉情を刺戟して来た。彼にとつて、この想像は最早他人の恋愛事件ではなかつた。

この状況において、妻がどうも「甘い夢」に「陶醉」してゐるようだと感じたのであれば、通常、それは耐えられないことではないだろうか。引用部に続いて、彼がせきをいとおしむ場面を見よう。

彼は不意に其場でせきを抱きすくめたいやうな気持ちになつた。せきが堪らなく可愛い。そして彼は危くその発作的な気持ちに惹き込まれかけたが、ガタンと音のするやうな感じで我に還ると、驚いて其不思議な気持ちから飛び退いた。

「何と云ふ自分だらう」

彼はそれきりもう黙つた。そして自分の気の静まるのを待つた。然し彼の胸は淡いなりにせきをいとほしむ心で一杯だつた。

「何と云ふ自分だらう」と賛次郎は自身に驚くが、この驚きは読者の驚きでもある。この時の彼の衝動は一体どういふものであろうか。また、なぜせきをいとおしむ気になつたのだろうか。しかし、それを確かめるために本文を見返すと、そこには明確な説明がなされていないことに気付く。「不思議な力」、「不思議な気持」と「不思議」という語が二度使用され、また、「不図」、「思はず」、「不意に」という言葉や、「発作的な気持」という表現があるのみである。であるから、先行論では次のような解釈が試みられてきた。越智氏はこの賛次郎の衝動を「世の常の常識や道徳では律し切れない人間の根源的情動」⁽¹³⁾と捉える。そして、「此処には、人類が有史以来築き上げて来た約束事である倫理の城壁に瞬時の亀裂を生じ、何かが突出しようとしている(中略)それは、又、反面から言えば、無限に自由な本来の自己を回復し得た瞬間で

ある」と述べる。田中氏は「せきに対して性的欲望を向けることで、賛次郎は自らが性的にイニシアティブを取り得る、性的に(女)を征服し得る立場にあることを確認する」⁽¹⁴⁾ための男の手法であるとする。また、張蓮氏はルネ・ジラルの『欲望の現象学』の理論を持ち出してこれを解釈しようとする。即ち、「欲望の主体(S)は直接に欲望の対象(O)に向かうのではなく、他者という媒介(M)を通して欲望を生じさせる」とするジラルの理論を賛次郎に当てはめ、「賛次郎はGのせきに対する欲望を媒介として、せきを欲望していると言うことができる」⁽¹⁵⁾と説明する。

諸氏のいずれの説も一応尤ものように感じられるが、しかし、その説明を作品外の抽象的概念・理論に求めているところに恣意性が感じられることは否めない。妻が他の男と関係を持つたかもしれないという疑惑の中で、却って欲情するという感覚自体がそもそも特異なものであると考えられるが、それが「不意に」、「思はず」起こつた「発作的」で「不思議な気持」であるとされ、さらにはその理由が「実際不思議な力」⁽¹⁶⁾で「不図」感じたことによるのであれば、もはやそれが如何なるものなのか、本文からは理解し難い。賛次郎の心理の説明は暁されている。

しかし、それが何なのかを無理に説明するよりも、むしろ「不思議な気持」をまさしく「不思議」なものとして一旦捉えてみれば、その感情を持つということが指示するところの

ものは理解できるのではないか。「不思議」であるというこ
とは、人間の考えが及ばず解釈できないことを指し、また普
通ではないことを示す。であるならば、「不思議な気持」に
囚われるということは、整理がつかず、通常ではない心理に
なるということの意味すると考えられる。つまり、そもそも
異常なものであると考えられるものが「不思議な気持」とさ
れるのであれば、それを抱くことは即ちその者が惑乱状態に
陥ったことを示すに他ならない。

ここで、賛次郎は心の乱れが去来した後、「二夕側になつ
た力のない眼差しでぼんやり遠く往來の方を見てゐた」せき
に対しては恐ろしく感じたにもかかわらず、一方で、車から
降りて「ぼんやり遠い一点を見つめて歩いてゐた」せきに対
しては欲情していることにも注目したい。彼は同じ「ぼんや
り遠」くを見る妻の状態に相反する感情を抱くのである。こ
れは彼の心理変化を示すものであるが、同じような対象に対
しての、さほど隔たっていない時の中での変化であることを考
えれば、それは心理変化であると同時に、心理の変調であ
り、惑乱状態を示すものと解釈できるだろう。

さらに、この賛次郎の欲情からは次のことを確認できる。
それは、不義を犯したであろうと推認される段階においてな
お、賛次郎はせきを嫌悪することなく、むしろ彼女への思い
を増幅させているということである。彼はせきの迎雲館事件
を「最早他人の恋愛事件」とは考えられず、「抱きすくめた

いやうな気持」になる。そこから一度は「何と云ふ自分だら
う」と思い、「自分の気の静まるのを待」つことは待つが、
それでもせきを「淡いなりに」も「いとほしむ心で一杯だつ
た」という賛次郎の思いには、その心理のメカニズムが不明
瞭でも、間違ひなくせきへの好意が内在していると言える。
さらに言えば、その不可思議さ故に、これまで見てきたせき
への思いがこの場面においてこそ頂点に達しているかのよう
な印象すら受ける。しかしそれが惑乱した状態の中のもの
であることは、先に述べたところから明らかである。である
ならば、彼の欲情によつて募らせた愛は、正常なものではな
く、倒錯した愛であつたと言えるだろう。

そして、そのような彼の目の前に雨蛙が現れる。
雨蛙は其電柱が未だ山で立ち木だつた頃、其処から小さ
い枝が生えてゐた、その跡が朽ち腐れて今は臍のやうな
小さな凹みになつてゐる、その中に二足で重なり合ふや
うに蹲つて居た。その様子が彼には如何にもなつかしく、
又親しみのある心持で眺められた。その少し上に錆びた
鉄棒の腕があり、蜘蛛の巣だらけの電球が道を見下して
居た。雨蛙は其灯に集る虫を捕る為、こんな所につつま
しやかな世帯を張つて居るのだ。これは屹度夫婦者だら
う、さう思つた。彼はせきに雨蛙を示したが、せきは何
の興味も持たなかつた。

雨蛙は電柱の中に二足で蹲っているだけで、夫婦者とは限ら

ない。それはあくまで賛次郎の勝手な認識に過ぎないし、仮に夫婦者だとしても、それが「つつましやかな世帯」であるとは全く以て彼の思い込みである。彼は雨蛙を見る前に妻を「いとほしむ心で一杯だった」。雨蛙に対する認識はこの妻への気持ちに影響していると考えられる。彼が二疋の雨蛙につつましやかな夫婦のイメージを読み取るのは、越智氏が「つつましい生活を送る夫婦像を見たい」という願望が先行し、雨蛙を媒介として自分達夫婦を無理矢理そのイメージに押し込もうとしたに過ぎない」と述べるように、所詮は彼の虚しい願いでしかない。

しかし彼の願いの虚しさについては後程もう一度考察するとして、賛次郎の惑乱状態を確認している現段階において注目すべきは、彼が雨蛙に「つつましやか」さを見出している点である。この「つつましやか」さを夢見る賛次郎はその後町に帰って来た時、町に次のような感想を抱く。

間もなく二人は自分達の町へ帰って来た。それは昨日のままの静かな、つつましやかな町だった。いや、賛次郎には僅教時間前に出たばかりの町だったが、それが如何にも久しく見ない所だったやうに彼は思はれた。

ただ単に電柱の中に二疋蹲っていたに過ぎない雨蛙に対しては「つつましやか」な印象を見た賛次郎が、「僅教時間前に出たばかりの」「つつましやか」であったとされる町に対しては「如何にも久しく見ない所だったやうに」感じている。

これはある種の矛盾ではないか。しかも、「間もなく」とあるように、時間的にそこまで隔たりがない中で賛次郎はこの矛盾を感じている。ほぼ同時前において、対照的な印象を感じるべき対象には感じず、見ざるべき対象には見出す賛次郎がここに存在している。先の「ぼんやり遠くを見る妻の状態に対する相反した感情に加えて、ここでの感情を勘案すると、もはや賛次郎が惑乱していないと捉えることの方が難しい。

以上のように、賛次郎は迎雲館事件後のせきの「意味の解らぬ微笑」によつて惑乱し、倒錯した愛を募らせるのである。

五. 文学の意味

惑乱の中にいた賛次郎であったならば、作品の終末において数冊の小説集と戯曲集を焼き捨てる行為も、一義的な意味合いではなく、そこには錯綜する思いや感情、意味合いがあつてのことではなかつたかと考えられる。先行論では、例えば岸氏がこの焼却に「SやGを抹殺したいという願望があつたのではないだろうか」⁽¹⁸⁾と見ているが、果たしてそのみであろうか。妻をいとおしむ気持ちになつたとはいへ、それが惑乱した状態での倒錯したものであつたとすれば、その気持ちの絶対的であるという保証はないし、また安定したものであつたとは考えられない。まず本を焼却する場面を見よう。

その夕、賛次郎は四五冊の小説集と二冊の戯曲集とを本箱から抜き取ると、人知れず、裏山の窪地へ持ち出し、何か悪事をする者のやうな臆病さで焼捨て、漸くほつとした。

「何か悪事をする者のやうな臆病さで」とあることから、この焼却は彼にとつて罪悪を感じた行為であったことが推測される。と同時に、「漸くほつとした」ことから、それは安堵を得る行為であったこともまた間違いない。そもそも、「四五冊の小説集と二冊の戯曲集」とは賛次郎にとつてどのような意味があつたのだろうか。

「四五冊の小説集と二冊の戯曲集」とは、それ即ち文学である。賛次郎は文学を嗜む男であつたが、本作には彼以外にも文学をやる人物が多数登場する。竹野茂雄とその妻、及び山崎芳江、小説家G、劇作家Sである。

竹野茂雄は、「中学を卒業すると東京の私立学校の文科に入り、詩や歌を作り、青葉といふ号で、文学雑誌に投書などして居た」人物であり、「文壇の消息通で、よくさういふ話を賛次郎に聴かした」賛次郎の友人である。賛次郎は竹野から文学の影響を受けた。また、竹野の妻も文学に興味を持つ女であつた。

竹野は投書仲間の女と最初は文通に始まり、間もなく話は結婚まで進んだ。女は東京の水菓子屋の娘で美しいといふ方ではなかつたが、若いにしては心のしつかりした

女だつた。

「心のしつかりした」竹野の妻は竹野の投書仲間であつたのだから、文学に親しむ女であつたことが確認できる。しかし、そのことが「文学をやる女」が気に入らない竹野の長兄の癪に障つた。長兄は竹野の結婚に反対する。だが、竹野は家と絶縁し、文学が盛んなA市に移り住むことによつて、彼女との結婚を果たす。竹野夫婦は文学によつて結ばれた夫婦であつた。二人にとつて文学は、互いの絆を結びつけた紐帯である。

一方、山崎芳江、小説家G、劇作家Sは淫らな人物である。芳江は「男との関係ではよく噂に上」る人物で、その芳江と関係しているのが劇作家のSであつた。芳江は「堅いばかりが能ぢやない」と言うように、「心のしつかりした」竹野の細君とは違つた女である。またGは、肉体的に「何となく力強い感じに溢れ」、「女連れの前では憚られるやうな事まで巧みにその露骨さを消して話」す人物である。せきの迎雲館での一夜の経験が彼らに起因することは明らかである。

このように、賛次郎の周りには文学をやる竹野夫婦と、Gたちというそれぞれ違つた集団が存在した。その中で、まず竹野から感化された賛次郎は、自身の妻にも文学を教えたいと思う。なぜなら、文学をやるのが「一人では何となく淋しかった」からである。しかし考えてみれば、賛次郎は「一人で」文学をやつていたわけではない。竹野がいたはずである。

「近頃は自身でも短い文章を作り、竹野に見て貰つたりし」
ていたのであるから、竹野との文学的交流はむしろ深まつて
いたと言えよう。であるならば、ここで「一人では何となく
淋しかつた」のは、単に文学を誰かと共有したいという感情
以上に、愛するせきとさらに親密な仲になりたいという思い
があつたと考えられる。文学によつて結婚までした親しい友
人が身近に存在し、せきを好いていた賛次郎としては、文学
を夫婦で共有できるものとし、二人の仲をさらに深めたいと
考えても何らおかしいことではない。だから、賛次郎は妻に
文学の教養を教えたいと思つたのである。そういつた思いが
あつて、彼は講演会にもせきを連れて行こうとし、また、自
身が行けなくなつてもせきをそこへ行かせたと考えられる。
つまり、賛次郎にとつても、文学は夫婦の紐帯として機能す
ることが期待されるものであつた。

しかし、その期待に反して、文学を生業とする者によつて
妻は不義を犯してしまつた。もちろん、それによつて賛次郎
は一度妻に対して「いとほしむ心」になるわけだが、それが
持続するものではなく倒錯したものであつたこと、また、彼
の心は惑乱していたことは既に述べた。つまり、彼にとつて
それは絶対的なものではなかつた。ただ、彼にとつて文学が
夫婦関係にとつてあつてはならないことを逆に引き起こした
ものでもあつたことは確かである。

このように、賛次郎にとつて文学は二つの意味合いがあつ

た。そう考えると、文学書の焼却が意味することも次の二つ
のことを意味していたと考えられる。つまり第一に、先行論
でも論じられていたように、Gに代表される夫婦の脅威の排
除抹殺という意味合いである。それ故に賛次郎は「漸くほつ
と」できたのである。と同時に、第二として、それは夫婦の
紐帯の破壊をも意味していた。だからこそ、賛次郎は「何か
悪事をする者のやうな臆病さ」をも無意識的に感じざるを得
なかつたのである。「四五冊の小説集と二冊の戯曲集」は賛
次郎の錯綜する二つの意味合いを包含して灰燼に帰するので
ある。

おわりに

迎雲館事件をきっかけに、せきは変貌し、賛次郎は惑乱に
陥つた。そんな彼らの隔絶はもはや決定的である。二人の隔
たりが最も如実に表わされるのが、雨蛙に対する認識である。
賛次郎が「つつましやかな世帯」を見た雨蛙に、せきは「何
の興味も持たなかつた」のである。

先にも少し雨蛙について考察したが、今ここでもう一度考
えてみると、当たり前のことだが、雨蛙はそもそも雄雌互い
に夫婦という一定の關係性を保持する生物ではない。つまり、
電柱の途中にいたそれが雄と雌であつたとしても、それは偶
然居合わせたものと解すべきで、仮に何かを読み取るとして
も、賛次郎がそれを夫婦と見る自由と同じ程度に、例えばG

とせきを連想する自由もまたそこには潜在しているのである。また、賛次郎は「森の傍で何故こんな柱などに住んでゐるのだらう」と疑問を持ち、その疑問に対して「灯に集る虫を捕る為、こんな所につつましやかな世帯を張つて居るのだ」と考へる。しかし、雨蛙は雨が降る前後に樹木などに登る習性があり、これも生活のために世帯を張っているのではなくて、昨夜の雨のために習性に従つて行動しただけという可能性も十分ある。そのように考へれば、「意味の解らぬ微笑」を受け、惑乱させられながらも、せきを「訊けば直ぐ正直に答へる」人物であると認識し、また、焦らすような返答をされながらも却つて妻に欲情し、挙句の果てには雨蛙に「一つましやかな世帯」を見てしまうところに、賛次郎のおめでたい、言葉を換えて言えば妻への痛々しい思いと、認識の虚しさがあると言えるだろう。文学に続いて、何かを共有しようという賛次郎の試みが失敗するのは、雨蛙で二度目である。この失敗の先に二人の交流が望めるだろうかという問いを立てるなら、その答えは明るいものではあるまい。

失敗を繰り返す賛次郎は文学書を焼却する。その意味するところは先に述べたが、仮に彼がまだ文学に寄り縋つてせきとの仲の深化を求めるのであれば、焼き捨てないという選択肢もあり得た。しかし、彼はそれを焼却した。この焼却の選択からは何が読み取れるだろうか。それは賛次郎にとつての全てのリセットであり、文学を夫婦間に持ち込む前と変わら

ない、依然とした状態への後退である。

そのことが、賛次郎が祖母の看病をし、せきが迎雲館に泊まった晩に仄めかされていた。

その晩、彼は祖母と枕を並べ、早く床に就いた。祖母とは何年振りかで同じ部屋に寝ると思つた。

その晩とは賛次郎が祖母と共に「何年振りかで」寝た晩であると同時に、せきがGと同衾した晩でもある。つまり、一方は「何年振りかで」旧態依然のH町において祖母と寝、一方は変化するA市において文学者である男と寝るという対照的な構図がこの晩にあつた。ここに、賛次郎の依然とした状態への後退と、せきの変貌とが予兆されていた。

そして、H町については先に言及したが、さらにここで付け加えるならば、H町は「町だけの生活に満足出来ない者」が戻つてきても、組合によつて「その家を潰さぬだけの助力を惜しまない」場でもあつたということを最後に確認しておきたい。このことは町の相互協力体制が整つていることを示すと同時に、次のことも示している。即ちこの町には、町で満足できずに外部へと足を延ばすも、結局は町に戻らざるを得ない人間が常に存在していることである。賛次郎は、その御多分に漏れない人間であつた。木村氏は本作を「故郷への回帰の話」⁽⁹⁾としている。論者も賛次郎が町へと出戻りするという意味では木村氏の意見に賛成したいが、それは実際の行動によつてというよりも、文学書の焼却に読み取れ

ることであるということを述べておきたい。

文学も雨蛙に対する認識も共有できず、そもその根源を焼却する賛次郎と、彼にとつて期しなかつた蠱惑的存在へと変貌するせきに、もはや交わりは望み難い。以上、冒頭でも述べた通り、「雨蛙」は変貌する女と、それによって惑乱する男、その夫婦の懸隔を描いた物語であつた。

注

- (1) 木村泰子「志賀直哉における「雨蛙」執筆の意味」(『国語国文論集』第十三号、1984・6)
- (2) 越智良二「志賀直哉「雨蛙」の問題」(『愛媛国文と教育』第二十四号、1992・12)
- (3) 岸規子「志賀直哉『雨蛙』とその周辺」(『芸術至上主義文芸』二十七卷、2001・11)
- (4) 木村泰子 前掲論文
- (5) 越智良二 前掲論文
- (6) 岸規子 前掲論文
- (7) 田中絵美利「志賀直哉「雨蛙」論——〈男〉たちの〈美しい夫婦の物語〉——」(『日本近代文学』第七十一集、2004・10)
- (8) 張蓮「志賀直哉「雨蛙」を読む——不義の妻と欲情する夫に ついて——」(『多元文化』第八号、2008・3)
- (9) 岸規子 前掲論文

(10) 田中絵美利 前掲論文

(11) 張蓮 前掲論文

(12) 越智良二 前掲論文

(13) 越智良二 前掲論文

(14) 田中絵美利 前掲論文

(15) 張蓮 前掲論文

(16) 日本近代文学に見受けられる「不思議な力」という言葉に關して、出原隆俊氏は「〈内部〉と〈外部〉」という問題——日本近代文学の一面——(『異説・日本近代文学』2010・1)で考察している。出原氏は「不思議な力」やその類語が、多くの作品に見受けられることに注目し、作家の枠を超えた近代文学の共通のモチーフの存在について言及している。また、「内部」と「外部」という視点から、文学史的考察をし、いくつかの作品へのアプローチを試みている。「雨蛙」にも「不思議な力」という表現があることから、あるいは出原氏の考察と関係する部分があるかと考えられるが、それは別稿で考察したい。

(17) 越智良二 前掲論文

(18) 岸規子 前掲論文

(19) 木村泰子 前掲論文

【付記】「雨蛙」に就いて及び「雨蛙」の本文はすべて岩波書店発行『志賀直哉全集』第五卷(1999・4)所収のものに依つた。

(むらおか・しょう／本学大学院博士前期課程)